

第1日 伊勢物語

日本女子大学・改

解答

- 問一 2
問二 3
問三 2
問四 かえでの初紅葉に書きつけた「秋かけて」の歌
問五 男の、呪いの効果が現れることを信じ期待する気持ち。

解説

問一 傍線部が比較的長く難しそうに見えますが、読点で区切られた三つの部分の最初の方に決め手があるので落ち着いて検討しましょう。まず、初めの部分に含まれる「あらねば」の「ば」は、直前が打消の助動詞・已然形なので確定条件（ここは、原因・理由の用法で、「…ので」の意）を表します。次の部分では、「心苦し」が基本古語で、相手に対しては「気の毒だ」の意になります。この段階で正解が確定しますから、最後の部分の「あはれ」の意味も納得できますね。

問二 ポイントとなる「いなむずなり」の、「むず」は意志の助動詞・終止形ですから、次の「なり」は、断定ではなく伝聞の助動詞です。ここで、1・4は消えます。「口舌」の意味はとらえにくいでしょうから、「いなむず」と行動を起こすのが女か男か考えて（次文「女の兄、にはかに迎へに来たり」がヒント）判定しましょう。

問三 歌中の「……なくに」は、「……ないのに」と逆接になることが多い慣用句です。第五句の「え」が、「江」と「縁」（現在は「えん」ですが、撥音「ん」を表記しないで用いられた。ちなみに「えに」と書かれることもあった）との掛詞だと見破れたでしょうか。

秋 かけ て 言 ひ し な が ら も あ ら な く に
木の葉 ふりしく え に こ そ あ り け れ
と 書 き お き て 「 か し こ よ り 人 お こ せ ば 、 こ れ を や れ 」
と い ぬ 。 さ て 、 や が て 、 後 、 つ ひ に 今 日 ま で 知 ら ず 。
よ く て や あ ら む 、 あ し く て や あ ら む 。
い に し 所 も 知 ら ず 。 か の 男 は 、 天 の 逆 手 を 打 ち
て な む 呪 ひ を なる 。 む く つ け き こ と 。 人 の 呪 ひ と
は 、 負 ふ も の に や あ ら む 、 負 は ぬ も の に
や あ ら む 。 「 い ま こ そ は 見 め 」 と そ
い ふ なる。

昔、ある男がいた。ある女にあれこれと言ひ寄って長い年月がたった。（女も）人情のない岩や木ではないので、さすがに気の毒に思ったのであろうか、次第に男をいとおしく思うようになった。その頃は（暑い）六月の十五日頃であったので、女は体にできものも一つ二つできていた。女が（男の所に）手紙で言ってよこした。「今はもう（あなたのこと以外には）何の思うことありません。（しかし）体にできものも一つ二つできています。時候もたいそう暑うございます。それで少し秋風の立つ頃になったら、きとお逢いたしましょう」と言ったのだった。（ところが）秋を待つ時分になって、そこから、（女は）あの男の所へ行こうとしているそうだという噂がたって、問題になってしまった。それゆえ、女の兄が急に（女を）迎へに来た。それでこの女は、楓の初紅葉を（召使に）拾わせて、歌を詠んで（それに）書きつけて（男の所に）送ってよこした。

問四 「本文中の語句を用いて」という条件を大切に考えて解答を作りましょう。

問五 物語の作者は、「人の呪ひことは、負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらむ」と懷疑的な書き方をしていますが、この「男」は、「今こそは見め」と呪いの効果を信じたかったわけでした。

品詞分解・口語訳

むかし、男 あり けり。女 を とかく いふ こと 月 日
経 に けり。岩 木 に し あ ら ね ば 、 心 苦 し と
や 思 ひ けむ、やうやう あはれ と 思 ひ けり。そ の
ころ、六 月 の 望 ば かり な り け れ ば 、 女 、 身 に 瘡
一 つ 二 つ い で き に けり。女 い ひ お こ せ た る 。 「 今 は 何
の 心 も な し 。 身 に 瘡 も 一 つ 二 つ い で た り 。 時
も い と 暑 し 。 す こ し 秋 風 吹 き 立 ち な む 時 、 か な ら ず
あ は む 」 と い へ り けり。秋 ま つ こ ろ ぼ ひ に
こ こ か し こ よ り 、 そ の 人 の も と へ い な む ず な り
と て 、 口 舌 い で き に けり。さ り け れ ば 、 女 の 兄 、
に は か に 迎 へ に 来 た り 。 さ れ ば こ の 女 、 か え で の
初 紅 葉 を ひ ろ は せ て 、 歌 を よ め て 、 書 き つ け て
お こ せ た り 。

秋かけて……秋になったらと、心にかけて言い交わしながら、飽きてしまったわけでもないのに、木の葉が散り敷いて浅い江になるように、（あなたと私は）浅い御縁でしたね。

と書き残して、「あの方の所から使いをよこしたら、これを渡しなさい」と言って出て行った。そうして、そのまま、その後、とうとう今日まで（どうしているのか）わからない。幸せに暮らしているのだろうか、不幸せな暮らしをしているのだろうか。行った先さえもわからない。あの男は、天の逆手を打って（女を）呪っているということである。何と気味の悪いことよ。人の呪いというものは、（相手の身に）効果があるものであろうか、効果がないものであろうか。（男は）「今にわかるだろう」と言っているということだ。